

一獲千金の夢 — 遠藤初次郎の樺太渡島記

明治三十八年、日露戦争の戦勝により、樺太（現サハリン）は三十年振りに日本の領土となった。それまでロシアの流刑地となっていた島は、わずかに原住民が残るだけの未開の土地であり、加えて北緯五十度という酷しい自然環境下にある。

明治四十年、「樺太庁」は各地に移住者取扱所を置き、渡島者には交通費の便宜を計るなどして、積極的な移民の募集に乗り出している。しかし開発は並大抵のものではない。こうした状況の中、率先して島に渡ったのは、一獲千金を夢見る男たちである。新天地には何かがある！男たちを捉えた熱い思いは、あるいは、この時代における一種の熱病のようなものだったのかもしれない。その熱病が樺太開発の一端を担った。遠藤初次郎、彼もその病魔に取り付かれたひとりである。

初次郎は明治六年、富山県に生まれた。学校を出ると上京して柩屋に弟子入りしたが、北海道に憧れて海を越えた。好きな尺八を吹きながら虚無僧（こむそう）姿の無銭旅行である。各地を転々として浦河に着いたのが、明治三十年頃。手職を生かして柩屋を始め（「消えた柩屋根」の項参照）、好きな芝居小屋を建て、今日でいう高額納税者のひとりに数えられるまでになったが、持って生まれた放浪の血は鎮まらない。実は先に樺太に渡り、島の開発に携わっている父為吉から、時折様子を知らせる手紙が届いていた。「樺太はいいぞ。今にどんどん大きくなる。何をやっても面白いほど金になる。お前も来ないか……」その誘いに初次郎は飛びついた。

樺太へ行く。そう決心すると、初次郎は早速出発の準備に取りかかった。出発は今年（明治四十五年）の夏と決めた。四十という自分の年令を考えても、渡島は早い方が良い。弟子を二、三人連れて行き、まずは父の住む東海岸の栄浜で柩屋をやる。すべてはそれからだ。一郎（十三歳）とキミ（十一歳）以外の子どもはひとまず妻とここに残し、目鼻がついてから呼び寄せる。妻には浦河に親戚が多いからその点は安心である。弟子たちの身の振り方を決め、二つの山を処分するにしても春まではかからないだろう。初次郎はそう読んだ。しかし山の買い手はなかなかつかない。出発間際になって、ようやく製材所を営む高津弥三吉との間で交渉がまとまったが、値段はわずかに七十円だった。家一軒建てるのに千円かかった頃である。

明治四十五年初夏、初次郎は二人の子どもと弟子の小野寺・井上を連れて、ウロコベツ（現大通五丁目）の船着き場から舩（はしけ）に乗った。初次郎らに乗せた定期船日高丸は、夕暮の浦河を函館に向けて出発。そこから小樽、樺太の大泊（現コルサコフ）まで長い船旅が続いた。開通間もない汽車に揺られて栄浜に着いたのは、浦河を出て一週間余りもたってからだった。

おだやかな夏の日も束の間を過ぎた。樺太の冬は初次郎の想像をはるかに超えていた。零下三十度を下る日が続く、太陽は七時過ぎなければ昇らない。襟元が真白に凍った夜具からはい出て、ストーブに火をつけるときの寒さといったら……。夜は夜で、寒さのためにランプの油が凍りつき、火が消えてしまうことさえあった。どこの家も軒下には山のように薪を積み上げていた。

それでも一年が過ぎるとどうにか落ち着き、約束どおり家族を呼ぶことができた。親戚のひとりである弟子の三浦忠勝も迎え入れ、柩屋の経営は順調に滑り出した。移住者は年を追うごとに増えている。浜はニシン漁で賑わっていた。よし、今度はニシンだ。初次郎は早速漁場を開いた。無鑑札であ

る。もぐりだが良い船頭が見つかり大層儲かった。食事をする暇もないほど忙しい漁場の漁師を相手に、餅も作って売った。

大正六年、落合にパルプ工場が出来ると、それ目当ての移民をあてこんで、今度は落合へ越した。また桤屋である。義弟の政田吉三郎も呼びよせた。大正九年には兵役中の長男一郎の嫁として、姪の石突フサが渡島した。こうして初次郎の思惑通り一族が集まって来る。パルプ工場で落合の町が栄えてくると、次には雑貨屋を開いた。スーパーマーケットともいえるような大きな店である。やがて推されて町会議員も勤めた。

島中が好景気の中にあつた。各地にパルプ工場ができ、炭鉱ができ、漁場が開かれる。小学校では子どもたちが毎日のように転入してきた。それにもかかわらず当時の樺太は慢性の人手不足で、まじめにさえ働けばどこへ行っても仕事があつた。給料は道内に比べて五割も高い。昭和十年代、“樺太では酔っぱらって道端に寝ている稼ぎ人さえ、ポケットの中には十円札が三枚も四枚も入っている”という話が、北海道ではまことしやかに伝えられていた。樺太へ！樺太へ！移民の数は年々増えつづけ、昭和二十年までに島へ渡った者は、四十万人に達したという。

しかし家族、親戚に囲まれ、財を成し地位を築き、隆盛の一途をたどっていた遠藤初次郎も“好事魔多し”の例えどおり、無尽（金融機関）で人の保証人となり、一瞬のうちに財産を失った。やがて敗戦である。身ひとつで故郷浦河へ辿り着いたのは、三十七年振り、昭和二十三年のことだった。初次郎七十五歳であつた。

[文責 河村]

【話者】

遠藤 一郎	浦河町東町	明治三十二年生まれ（平成三年十月没）
石突 トシ子	浦河町築地	大正三年生まれ
三田村 ユキ	浦河町昌平町	大正元年生まれ
室谷 英男	浦河町緑町	大正十年生まれ
藤田 為一	浦河町入船町	明治四十三年生まれ
武中 進	浦河町潮見町	昭和四年生まれ

【参考】

樺太基本年表	昭和四十六年	北海道
樺太連盟四十年史	昭和六十三年	社団法人全国樺太連盟